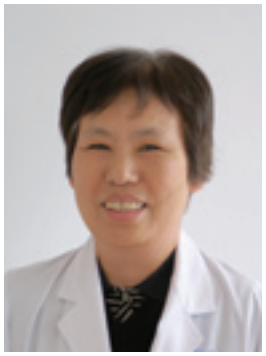
医療は使命感がなければできない



医療法人若葉会 近藤内科病院 ホスピス徳島 緩和ケア病棟長
荒瀬 友子 あらせ ともこ

ガンの末期患者の身体の痛みや心の重さをいかに軽減するか。またその家族へのアドバイスなどを行う緩和ケア。近藤内科病院・ホスピス徳島の病棟長として、7年間で600人あまりの患者をケアしてきた荒瀬先生。

「全ての患者さんがみんな違うのだから、慣れるということはありません。誠意がなければわかってしまいます。信頼されなければだめなんです。また医師だけでなくナースを始め薬剤師や栄養士、ボランティアなど多くの人のチームワークがなければできません。重く、つらい仕事ですが、後でご家族の方に良かったと言ってもらえればほっとします」

その口調は穏やかで優しい。深く大きなものを背負いながらご苦労されているそぶりも見せない。

大学を卒業後、麻酔科医として徳大と高知市民病院、愛媛県立中央病院、高松市立病院などを行ったり来たり。

1984年に大学病院の皮膚科のご主人、荒瀬誠治氏（徳島大学病院皮膚科科長・教授）のドイツ留学について行き、1年少し休業。86年に復帰したのは救急部の助教授としてでした。同時にICUの責任者を頼まれて、ピンチヒッターのつもりで引き受けたのが、副部長として10年以上勤めることになりました。

「当時は人数も少なく、機械も今のように複合された高度なものもありませんでしたから大変でしたが、このときの経験は現在の仕事にも生かされています」

徳大のICUの礎を築いたと感じたとき、50才を前にして、さて何をしようかと考え『心の整理』を決意。ニュージーランドへ語学入学しました。ここでホスピスと出合います。ホスピスのことはICUにいる頃から少し意識していたので、語学に挑戦しながら資格を取るための勉強を始めました。

「現地の人でもこの資格を取るのは大変なんです。私にはまず言葉の壁がありました。授業も一番前に座って録音して聞き返すようにしましたが、結局はレポートでギブアップしてしまいました」

資格はあきらめたものの、大学の教授、現地の医師やナースと知り合いになり、多くのことを学べました。

帰国後、近藤内科病院が緩和ケア病棟の建設を計画していたために請われ、当初からソフト面でアドバイス。病棟長として現在に至っています。

「現在、医療の現場は医師不足や待遇の問題などとても厳しい時代です。これには医師の社会的地位や給料・勤務時間などの制度、また政策の問題もあるかもしれませんが、医師としてのモチベーションをどう持って行くか。また自分のやっていることに意味があるんだという使命感がなければできません。それがあれば大変やりがいのある仕事です。後輩の皆さん、がんばってください」

略歴

香川県生まれ
1973　徳島大学医学部医学科卒業
　　卒業後麻酔学教室に入局、その後
　　四国各地の病院に勤務
1984～85　一時休業してご主人の留学でドイツに
1986～00　徳島大学救急部ＩＣＵ 副部長 助教授
2000　ニュージーランド、オークランド大学院コースで
　　ホスピスを学ぶ
2002　近藤内科病院に常勤、緩和ケア病棟長